

存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

林 龍 樹

はじめに

本願寺第三代覚如上人(一二七〇～一三五五)。以下、敬称を略す。)の長子存覚(一二九〇～一三七三)は、多くの著作を残し、後世の真宗教学形成に大きな影響を与えた。中でも、浄土真宗の根本聖典である親鸞(一一七三～一二六三)『顕浄土真実教行証文類』(以下、それぞれ宗祖、『教行信証』とする)を史上初めて訓詁註釈した『六要鈔』は、『教行信証』を解釈する際にまず第一に参照されてきた書物といえる。ところが、後世における本書の評価は様々である。

第八代蓮如(一四一五～一四九九)は、存覚を「存覚は大勢至の化身なり⁽¹⁾」と讃え、『天正三年記』に『教行信証』又は『六要鈔』等常に御覽せられ⁽²⁾とあるように『教行信証』を拝読する際には、常に本書を参照していたことがわかる。また、江戸時代の宗学においても存覚教学をベースとして成立していることが指摘されている⁽³⁾。また一方で、近年では存覚が本書の中で引用する仏典の系統を問題として、浄土門ではなく聖道門の立場から解釈しているとの批判もみられる⁽⁴⁾。

このような評価を受ける『六要鈔』は、どのようにして著されたのか。これまで、証果論などの教学上の問題に

において浄土宗鎮西・西山諸師の教学との関係性を考察する論考がいくつも提出されてきたが、そもそも『六要鈔』における仏典の註釈態度とはいかなるものかを体系的に論じたものは、管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では、以上のような問題意識のもと、その一環として『六要鈔』における『教行信証』の天親（四〇〇〜四八〇頃）『浄土論』・曇鸞（四七六〜五四二）『往生論註』（以下、それぞれ『論』・『論註』とする）引用文註釈箇所を対象として、その註釈方法を明らかにすることを目的とする。

先行研究では、『六要鈔』中の『論註』註釈箇所において、鎮西派良忠（一一九九〜一二八七）著『無量寿経論註記』（以下、『論註記』）との関係が指摘されている。

長谷法薫氏は、『六要鈔』と浄土宗鎮西・西山諸師の著作との類似点を挙げて、

鎮西系及び西山系に於ての教義の代表的著作と、『六要鈔』との解釈上の交渉を求めたるに、『御本書』に於ける引用経論釈中、『大無量寿経』の文を消釈するには、多く望西楼了慧の『無量寿経鈔』の釈義を借り、『往生論註』の解釈には、これまた良忠の『往生論註記』の説を移植（後略）⁵⁾

と述べ、『六要鈔』が『論註記』の説を適宜用いて、『教行信証』『論註』引用文を註釈していることが指摘されている。また、岩田光氏は、『六要鈔』と良忠著作の引用文に注目し、

従来『六要鈔』は了慧『無量寿経鈔』からの影響が指摘されてきたが、それに加え、『観経疏伝通記』や『往生論註記』をはじめとする良忠の著作からの影響も窺うことができる。⁶⁾

と述べる。

これらの指摘は、いずれも重要な指摘であるが、共通部分や引用文に関する言及であり、存覚が『論註記』の何を採用し何を採用しなかったのかなど、細部にわたって未だ研究の余地があると考ええる。

そこで本稿では、先行研究を踏まえ、まず『六要鈔』における存覚の『教行信証』註釈の姿勢について窺う。そして、『論』・『論註』引用文の註釈箇所と良忠『論註記』を比較・検討することで、『六要鈔』における『論』・『論註』註釈方法を明らかにしたい。なお、本研究の中心は『教行信証』『論註』引用文に対する存覚註釈箇所であるが、その註釈元となる『論』引用文註釈箇所についても適宜確認していく。

I 存覚の『教行信証』註釈の形式と姿勢

『論』・『論註』引用文に対する註釈文の考察に先立って、存覚の『六要鈔』における『教行信証』註釈形式とその姿勢について窺いたい。

まず形式について、存覚は、初めに註釈箇所を科段分けし、冒頭から順を追って註釈している。そして、難解な語句に対して「A者B也」や「A為B」というような、いわゆる訓詁註釈の形式⁸⁾（随文解釈）をとっている。このような形式は、達意的な註釈を施す同じく存覚の『選択註解鈔』とは体裁が異なり、後に比較対照として挙げる浄土宗諸師の註釈書と同様である。

存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

次に、存覚が『教行信証』を註釈する際に用いる引用文献の範囲について確認したい。前述のように、存覚教学が批判される理由の一つに、註釈に用いた仏典の系統が挙げられる。存覚が浄土經典ではなく唯識など一般仏教で用いられる書物を引用していることで、聖道門的立場から宗祖の著作を解釈しているとの評価がなされてきた。ところが、以下の点から、存覚は仏典を闇雲に引用して『教行信証』を註釈しているのではなく、一定のルールの範囲でおこなっていると考ええる。

まず、存覚は所覧の『教行信証』冒頭にもあつたと思われる題号「顕浄土真実教行証文類序」の十一文字を註釈して以下のように述べる。

先積^{スル}題中^ヲ十一^ニ字内、初^ノ之一^ト字与^ニ後^ノ三字^ニ能積^レ之^ヲ詞、中間^ノ七^ハ字所積^レ之法^{ナリ}。初言^ニ「顯^ト」者、『広韻』云、「呼典切、明著^{ナリ}。」「玉篇』云、「虚典切、明也。」……(中略)……「序^ト」者、所謂^ニ次^ニ・由^ニ・述^ニ義^{ナリ}、今^ハ述^レ序^也」⁹⁾。

存覚所覧の『教行信証』については、未だ明らかになっていないが、その冒頭には「坂東本」や「西本願寺本」などと同じように「顕浄土真実教行証文類序」の十一字があつたようである。そして、存覚は、所覧の『教行信証』の体裁から、『教行信証』の題号「顕浄土真実教行証文類序」を、直ちに「序文」（はじめに）の意と解釈し「総序」の題号とするのではなく『教行信証』全体にかかるものとして註釈している。つまり、序を「述序」として『論語』やその註釈書を引くことで、「述して作せず。」という『教行信証』全体を通した宗祖の選述態度の表れとみている。そして、存覚もこのような姿勢から『教行信証』を註釈していることが窺われる。

また、以下は「教文類」冒頭の「謹按浄土真宗」¹⁰⁾の中、「真宗」とは何を指すのかということについて註釈す

る箇所である。

言ニ「真宗」一者、即浄土宗也。「散善義」云、「真宗回レ遇。」上「五会讚」(巻本)云、「念仏成仏は真宗。」上「五会讚」(巻本)中、依ニ『大般若経』作「離ニ六根」讚上云、「色性本来無障礙、無レ来無レ去是真宗。」上「声性・香性・味性・触性・法性、皆同。是以般若一名真宗。又耆闍法師立ニ六宗時、一以ニ『毘曇』一名因縁宗、二以ニ『成実』一名仮名宗、三以ニ『大品』及同『大論』一名誑相宗、四以ニ『涅槃』并『花嚴経』一名常住宗、五以ニ『法花』一名曰真宗、六以ニ『大集』一名曰円宗。如此義者、真宗之名、正在ニ『法花』。何限ニ浄教ニ独名ニ真宗。答。離ニ六根」讚、雖レ依ニ『般若』一、既是『浄土五会讚』文ナリ。

ここで、存覚は善導(六一三〜六八一)「散善義」の文に続き、法照(八〇九世紀頃)『五会念仏法事讚』から、「念仏成仏是真宗」の文をその例証として引用する。存覚は、それに続いて同じく『五会念仏法事讚』の文を引き、ここでは「般若」をもって「真宗」と名付けているのではないかと問答を設けている。

これについて存覚は、『五会念仏法事讚』には『大般若経』による讚において「真宗」と名付けている箇所もあるが、作者である法照は浄土教の先師であり、問題ないと理解している。このことから、存覚は、浄土教以外の典籍であっても、浄土教の先師⁽¹²⁾が引用しているならば用いても差し支えないという認識のもと註釈を行っていると考えられる。

以上の事から、『六要鈔』における存覚の註釈活動は、あくまでも先人の説を用いて行うものであり、その仏典の依用範囲は浄土教の諸師が引用する範囲内ではないかと思われる。

「存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

II 『論』引用文の註釈

それでは具体的に、『六要鈔』本文の検討に移りたい。『教行信証』における『論』引用文は巻ごとに以下の通りである。

「教文類」…無し

「行文類」…二文 ①願生偈⁽¹³⁾ ②利行満足の文⁽¹⁴⁾

「信文類」…一文 ③利行満足の文⁽¹⁵⁾

「証文類」…一文 ④利行満足の文⁽¹⁶⁾

「真仏土文類」…一文 ⑤願生偈⁽¹⁷⁾

「化身土文類」…無し

存覚は右に挙げた『教行信証』所引の『論』を註釈する場合、その文が『論』のどの文なのかを示すか、自身の言葉で少々註釈を施す程度である。また、仏典を引用する際も、『論』の別の箇所、または、その註釈書であり親鸞が自身の思想体系の中でその言説を多く採り入れている『論註』を援用するのみである。これはある意味、『教行信証』の思想を窺う上で当然の註釈態度ともいえるだろう。

III 『論註』 引用文の註釈

次に、『教行信証』の『論註』引用文に対する存覚の註釈について窺いたい。まず、『教行信証』における各巻ごとの『論註』引用文は以下の通りである。便宜上、巻ごとに番号を振り、行①、信①などと表記した。

「教文類」…無し

「行文類」…八文

行①浄土論大綱の文⁽¹⁸⁾、行②論主自督の文⁽¹⁹⁾、行③起観生信章の文⁽²⁰⁾、行④觀察体相章の文⁽²¹⁾、行⑤利行満足章の文⁽²²⁾、行⑥觀察体相章の文⁽²³⁾、行⑦觀察門の文⁽²⁴⁾、行⑧論主自督の文⁽²⁵⁾。

「信文類」…九文

信①起観生信章の文⁽²⁶⁾、信②起観生信章の文・総結釈の文⁽²⁷⁾、信③起観生信章の文⁽²⁸⁾、信④浄入願心章の文⁽²⁹⁾、信⑤善巧摂化章の文⁽³⁰⁾、信⑥善巧摂化章の文⁽³¹⁾、信⑦觀察門の文⁽³²⁾、信⑧八番問答の文⁽³³⁾。

「証文類」…十四文

証①觀察体相章の文⁽³⁴⁾、証②觀察体相章の文⁽³⁵⁾、証③觀察体相章の文⁽³⁶⁾、証④觀察体相章の文⁽³⁷⁾、証⑤觀察体相章の文⁽³⁸⁾、証⑥起観生信章の文⁽³⁹⁾、証⑦觀察体相章の文⁽⁴⁰⁾、証⑧浄入願心章の文⁽⁴¹⁾、証⑨善巧摂化章の文⁽⁴²⁾、証⑩障菩提門章の文⁽⁴³⁾、証⑪順菩提門章の文⁽⁴⁴⁾、証⑫名義撰対章の文⁽⁴⁵⁾、証⑬願事成就章の文⁽⁴⁶⁾、証⑭利行満足章の文⁽⁴⁷⁾。

「真仏土文類」…六文

存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

真①観察体相章の文⁽⁴⁸⁾、真②観察門の文⁽⁴⁹⁾、真③観察門の文⁽⁵⁰⁾、真④観察体相の文⁽⁵¹⁾、真⑤観察体相章の文⁽⁵²⁾、
真⑥観察体相章の文⁽⁵³⁾。

「化身土文類」：一文

化①成上起下の文⁽⁵⁴⁾。

『論』とは異なり『論註』は多く引用されているため、右記の『六要鈔』における『論註』註釈箇所を、先でも使用が認められた良忠『論註記』との関連によって以下の三つに分類する。

(1) 『論註記』の解釈をほぼ受けていると思われる箇所

(2) 『論註記』と同じように註釈しているが、一部別義を示す箇所

(3) 『論註記』との関連が見いだせない箇所

以下、これらを順番に例を挙げて確認したい。

(1) について

はじめに、(1)『論註記』の解釈をほぼ受けていると思われる箇所を確認する。この、(1)に分類されるのは、証①である。なお、以下、両書を対照して比較するにあたり、便宜上、改行・省略・句読点や括弧の追加等を行った。

・証①観察体相章引用文についての註釈

・『六要鈔』「証文類積」⁽⁵⁵⁾

・『論註記』卷第四⁽⁵⁶⁾

次『浄土論』、此有五文。第一文者、国土莊嚴十七種中其第十一之莊嚴也。今言「声」者不闕二音声、是名字也。

言二「經言」一者、問。指二何經耶。答。指二『覺經』一也。彼『經』(平等覺經卷一)云、「十七、我作仏時、令我名字聞八方上下無數仏国、諸仏各於弟子衆中、歎我功德・国土之善。諸天・人民・蠕動之類聞我名字、皆悉踊躍、來生我國。不爾者我不作仏。」

『平等覺經』云、「十七我作仏時令下我名号聞中八方上下無數仏国。諸仏各於弟子衆中歎我功德国土之善。諸天人民蠕動之類、聞我名字皆悉踊躍來生我國。若不爾者我不作仏。」上『大阿弥陀經』同之。

問。此願文不云正定聚。答。既云來生我國、即入正定聚也。

このように、根拠として引用する経文や、問答の課題は同じである。「正定聚」というタームは登場するものの、その思想面を大きく踏み込むものではなく、『論註』に示される莊嚴の相についての、いわば語句説明のようなかたちで『論註記』が援用されている。また、証②についても同様のことが指摘できる。

(2) に つ い て

次に、(2)『論註記』と同じように註釈しているが、一部別義を示す箇所を確認する。(2)に分類されるのは、行①②④、信①④⑤⑧、証④⑥⑦⑧⑨⑩⑬⑭、真②③④である。

・信⑤善巧撰化章引用文についての註釈

以下に引用する『六要鈔』文は、「信文類」『論註』善巧撰化章引文の註釈箇所である。

・『六要鈔』「信文類積」⁽⁵⁷⁾

次『論註』文。下巻解義分中、第五善巧撰化章之積也。

名曰善巧撰化一意者、以二巧方便回向善根一撰化衆生^ニ之義而已^{ナラクシク}。

「三輩生中」^ト等者、問。『寿』『觀』^ハ兩經是開合異^{ナリ}。而^ニ『觀經』中說^ニ未發心往生之人^ヲ。謂九品中々三・下三^ノ

・『論註記』卷第五⁽⁵⁸⁾

第五善巧撰化中^ニ。一牒^ニ章目^ヲ、二正積^ス。積中四。一^ニ明三止觀具足^{シテ}成^{ズル}。二柔軟心^ヲ。三略明^ニ善巧方便^ヲ。四^ニ廣明^ニ善巧方便^ヲ於^テ此^ノ相^{ナル}コト^ヲ。一。二。三。略明^ニ善巧方便^ヲ。四。廣明^ニ善巧方便^ヲ於^テ此^ノ四段^ニ各有^ニ論註^一。

「善巧撰化」者、以^テ二巧方便回向^ノ善^ヲ能^ク撰^ス化衆生^ヲ故名^ニ善巧撰化^一。「巧方便」者、『止觀』四云、「方便名^ニ善巧^一。善巧修行^ヲ以^テ二微少善根^ヲ能^ク令^ニ無量行^ヲ成^ス。」^上 巳

・・・・(中略)・・・

「三輩菩提心」等者、問、『觀經』所說^ノ九品之中^ノ、中下六品不^レ云^ニ發心^ト。兩經相違^ス。云何會通^{セン}。答。各逗^ニ機緣^ニ

六品是也。『壽經』三輩共說二發心_ト、相違如何。答。雖_レ有_レ二異義_ト且_レ一義云、『大經』說相順_ト常途_ト說_ト。聖道諸教皆談_レ二發心得道義_ト故。『觀經』之中說_レ三未發心皆得_レ往生_ト。由_レ二仏力_ト故。諸師所立、其義不同。不能_レ具述_ト。

問。註家之意、許_レ此義_ト耶。答。此有_二二意_ト。一不_レ許也。今釈或云_レ「莫不發皆菩提之心_ト」、或云_レ「若人不發菩提心_ト」故。二所_レ許也。唯嫌_三不正許_ト三信往生_ト故也。就_レ第二義_ト、可_レ有_レ即云_三『大經』所說菩提心者_ト則指_三三信_ト之義趣_上也。

問。宗家之意、依_レ何義_ト耶。答。許_レ未發心之人往生_ト。是為_レ凡夫濟度弘願本意_ト故也。

「凡釈_ニ回向名義_ト」_ト等者、其意_シ可_レ見_ト。

並_二不_レ相違_ト。

問。今家為_レ許_ト未發心者往生之義_ト。答。一云、可_レ許也。謂『觀經』說其文明_{ナルガ}故是以三信之文、三義之說、唯具_二信心_ト及具_二十念_ト。此恐_レ応_レ許_ト三未發心者往生_ト彼国_ト。二云、不_レ許也。發心往生經論明_{ナルニ}故。但『觀經』者、台影_ニ二師各会_ト通_ト之_ト。恐_レ今同_レ彼_ト。問。二義何_レ正。答。若準_レ文者、後義為_レ正。若準_レ義者、前義為_レ正。

「凡釈回向」_ト等者、問、五念門中回向与_二今回向_ト為_レ同_ト。

『安樂集』下云、「積_ニ回_レ向_レ名_ニ義_ヲ者、但_シ以_テ一切衆生既有_ニ為_レ異_{トヤ}。若_シハ同_{ナリト}者文云、「礼_レ拜_等五行所集善根不_レ求_ニ自_レ樂_ニ、欲_レ拔_ニ衆_ニ生_ノ苦_ヲ作_下願_撰取_ニ衆_ニ生_ノ同_生安_樂上_ニ。是_ヲ名_ニ巧_ニ方便_ニ回_レ向_レ成_レ就_ト。」上_ハ。

(後略)

長_レ苦_ヲ、勸_ニ回_レ向_レ西_ニ為_レ成_ニ大_ニ益_ニ。然_レ回_レ向_レ之_レ功<sub>不_レ越_ニ於_レ六_ニ。何_レ等_ヲ為_レ六_ト。一_者將_{モテ}所_修諸_業回_ニ向_レ彌_陀、既_ニ至_ニ彼_ノ國_ニ、還_テ得_ニ六_ニ通_ニ濟_ニ運_ス衆_ニ生_ニ。此_即不_住道_也。
二_回因_レ向_レ果_ニ。三_回下_レ向_レ上_ニ。四_回遲_レ向_レ速_ニ。此_即不_住世_間。五_回施_ニ衆_ニ生_ニ、悲_念向_レ善_ニ。六_回入_レ去_ニ却_レ分_別之_レ心_ヲ。回_レ向_レ之_レ功_只成_ニ斯_ス六_ニ。」上_ハ今_{『論註』}
文_与今_回向_レ第_五之_レ義_其意_同也。</sub>

字数の都合上、『論註記』の文は大幅に略したが、『六要鈔』と比較して、『論註記』は、『論註』本文について非常に細かく註釈を施し分量も多くなっている。

存覚は、まず註釈箇所が『論註』の「善巧撰化章」の文であることを示し、その意味について解説する。続いて、「三輩生中」以下の文を解釈するにおいて問答を設けているが、未発心の衆生の往生について『無量寿経』と『観無量寿経』（以下、『観経』とする）の説示の違いを問題としている。次に、曇鸞が未発心の衆生の往生をどう述べているかについて問答を設け、二通りの解釈を述べる。そして、ここまでの両者を比較すると、問答における問

題点など、おおよそ註釈の内容は類似している。

次に「凡釈回向之名義」以下の註釈についてであるが、「回向」の義について『論註記』は、行者が五念門を修めて得た善根を衆生に回向して同じく安樂国に往生せんとするもので、これは宗祖義と相違する。存覚は、この箇所に『安樂集』を引き、道綽（五六二く六四五）が「回向」について六つの義を挙げる中、回施衆生の義であると述べている。

未発心のものの往生を許す根拠と回向の義の根拠については違いが見られる。前者については、良忠が『觀經』の説を挙げるのに対して、存覚は阿弥陀仏の弘願の本意を根拠とする。

このように、取り上げる問題やその形式についてはほぼ共通しているが、一部宗祖義に遵って『論註記』と異なる解釈を施している。

・行④『論註』総説分觀察門・妙声功德成就引用文についての註釈

次に、『教行信証』「行文類」引用の『論註』総説分觀察門・妙声功德成就引文についての註釈箇所である。

・『六要鈔』「行文類釈」⁽⁵⁹⁾

所引『論註』、所_レ積ニ_二莊嚴眷属功德成就_一文也。問。胎生
辺地是非_二化生_一。何_レ因_ナ總_テ（論註卷下意 云ニ「莫非化生」
一。答。胎生辺地非_二報土相_一。今（論註卷下）言ニ「正覚
花化生」一者、正報土相_{ナリ}。

・『論註記』卷第四⁽⁶⁰⁾

十三眷属功德中「淨華化生」者、問、辺地胎生非_二是化生_一
一。何_レ云_ニ淨華之所_二化生_一。答。智光云、「就_テ機_ニ殊_ニ分_ニ有_一
一。胎化_一。究竟_ニ論_レ之_ニ皆是化生_一。」^巳上『平等覺經』上云、
「生_ニ無量清淨_ニ佛_ニ者、都皆於_ニ是七宝水池蓮華中_一化生。

「同一」等者、一義云、積ニ彼土相ニ、非ニ此土行ニ。故『智論』
（大智度論卷二二初品）云、「無量寿仏国、人生自然能
念仏。」又『小經』云、「皆悉念レ仏。」今義不レ然、於レ彼
念仏 非ニ敢所レ争。經說論判分明之上、

花台端座念弥陀、又以炳然。但今文者指ニ此土行ニ。

所ニ以然者、当句次上文（論註卷下）云、「凡是雜生世界、若
胎若卵、若湿若化、眷属若干 苦樂万品。以ニ雜業ニ故。」
上 巳

此積之意、雜生世界能生苦因、雜業異 故四生不レ同。
安樂国土念仏、一行為ニ生因ニ故純一化生。以テ之思レ之、淨
穢相對 因果必然 言ニ「無別道」一。

又次下（論註卷下）云、「遠通 夫四海之内皆為ニ兄弟ニ
也。」上 巳

彼『論語』言有ニ此妙談一。言ニ四海者、非ニ淨土相ニ。閻浮
同行同一仏子、勸ニ其相親ヲ称ニ之兄弟ニ。兼標レ可レ為ニ
來生俱会一処親厚ニ而已。

則自然長大亦無ニ乳養之者一。」上 巳

「同一念仏無別道故」者、是積ニ彼土相ニ非ニ此土行ニ。『智
論』二十二云、「無量寿仏国人生 便自然能念レ仏。」上 巳

『小經』云、「皆悉念レ仏。」上 巳

「四海之内皆為兄弟」者、『論語』云、「四海之内皆為ニ
兄弟ニ也。」上 巳 彼妙淨土雖レ無ニ四海ニ因ニ准ニ余方ニ且云ニ四
海一。『皆為ニ兄弟ニ者、今彼極樂皆弥陀有。其中聖衆
悉是其子。信知、彼土久生新生皆為ニ兄弟ニ。觀音是大
兄王子、勢至已下悉是其弟。我等若生、忝成ニ末弟ニ。
南無阿弥陀仏。驚入ニ火宅ニ方宜ニ救濟ニ。」

右の箇所でも、まずその引用文が原典のどの箇所に当たるかを述べて、具体的に註釈に移る。ここでは、はじめの「化生」についての引用文は異なるが問答の課題は共通している。

その後、「同一念仏無別道故」の註釈については違いが見られる。『論註記』では、念仏を「彼土の相」として、『大智度論』と『阿弥陀経』を挙げる。これに対して、存覚は直接良忠の名は出さないものの「一義に云く、彼土の相を釈し、此土の行にあらず。」と『論註記』の説を挙げる。そして、「今義然らず」として、その説を否定しているのである。結果、存覚は念仏を此土の行と示す。

その他、行③では『論註』冒頭に言及される龍樹（一五〇～二五〇頃）『十住毘婆沙論』『易行品』に説かれる難易二道について註釈をしている。『論註記』では、難行道の難について五種の難を挙げるが、その根拠として澄叟（一〇世紀頃）『註浄土十疑論』を引用する。良忠は更にそれぞれの難について、「先師云」として聖光房弁長（一一六二～一二三八）の著述と思われる文が引用されている。この書籍が何であったかは確認出来ないが、伝良榮（生年不詳～一四二八）『安樂集私記見聞』⁽⁶¹⁾には「鎮西云」として同文が引用されている。存覚は、『六要鈔』で同じく五種の難について、『註十疑』を引用しているが、聖光の文は一切採用していない。やはり、浄土異流（良忠）の著作を用いながらも、宗祖義を示す目的から省略したと考える。

また、②に分類したその他の箇所においても、関連の度合いに差はあるが、同じような方法で註釈を行っていることが確認できる。

(3) について

次に、(3)『論註記』との関連が見いだせない箇所について確認する。該当箇所は、これまで確認した(1)(2)以外の

すべてになるが、基本的に註釈の形式は(1)(2)と同様に、註釈箇所を科段分けして、順番に訓詁註釈を行っている。また、存覚は『論註』引用文を註釈する際に、『論註記』に依らない箇所は、一部語句の解説に『維摩経』などの経名を挙げるが、基本的に「浄土三部経」と浄土真宗七祖の聖教を引用することで論註の註釈を行っている。

IV 第二期著述との『論註』註釈の比較

前述のように存覚は、その生涯において多くの著作を残しているが、それらの執筆時期は明確に以下の三期に分かれる。

第一期、元亨四（一二二四）年

『浄土真要鈔』、『諸神本懐集』、『持名鈔』、『破邪顕正抄』、『女人往生聞書』⁽⁶³⁾

第二期、暦応元（一二三三）年

『顕名鈔』⁽⁶⁴⁾、『決智鈔』、『歩船鈔』、『至道鈔』、『選択註解鈔』、『報恩記』、『法華問答』

第三期、文和五（一二五六）年以降

『浄土見聞集』、『嘆徳文』、『六要鈔』など

外川獎氏は、これらの撰述時期が異なる著作間における存覚教学の展開（諸行往生の可否など）について指摘している。⁽⁶⁵⁾

このような撰述時期の違いについては、存覚研究の諸研究において言及されているが、教学の変化があるかどうか

かについては、未だ明らかになつておらず、存覚研究において注意すべき点である。そこで、存覚の『論註』解釈の展開についても、確認したい。

第三期著作中では、宗祖の引用頻度の影響もあり、『論註』に対する言及は非常に多い。ところが、第一期・第二期著作中では、多くが迦才（七世紀中頃）『浄土論』に基づく曇鸞の生涯についての説示か、正定聚についての先師の言葉を挙げる程度である。そのような中、『顕名鈔』末⁽⁶⁶⁾では「楽」についての問答を設けて註釈する中で『論註』名義撰対章の文を引用する。

問ていはく、楽といふは苦に對することばなり。苦はすなはち樂のよるところ、樂はすなはち苦のふすところなり。その体をたづぬるに実体なし。されば苦にあらざるを捨受となづけて、樂受よりはまされりとす。いはゆる色界四禪のうち、三禪までは樂受、第四禪は捨受なり。すでに三界有漏の果報のうちに、なを下地は樂受、上地は捨受なり。しかるにいま浄土無為のさかひにをいて、なんぞ樂をきはむといはんや。もし樂をきはむといはゞ、かへりて有漏の果報に同ずべきをや。

こたへていはく、曇鸞和尚の『注論』（卷下）をみるに、「樂有三種」。一者外樂、謂五識所生樂。二者内樂、謂初禪・二禪・三禪意識所生樂。三者法樂樂、謂智恵所生樂。此智恵所生樂、從_レ愛_三仏功德_三起」といへり。このなかに、外樂といへるは欲界の樂なり、内樂といへるは色界三禪の樂なり。第四禪の捨受は、三禪の樂よりはいさゝかすぐれたれども、たゞ三界のうちの勝劣なるがゆへに、浄土の樂にはことなり。されば善導和尚、三界の苦樂を積せらるゝとき、「苦則三塗・八難等、樂則人天五欲・放逸・繫縛等樂。雖_レ言_三是樂_一、然是大苦。必竟無_レ有_三一念真實樂_一也」（定善義）といへり。三界のうちの樂は、まことの樂にはあらざるなり。法樂

といへるは、念仏の行者についていへば、いまだ穢土にありて凡身をすてざるとも、内に智恵と相応して虚偽ならず顛倒ならず、いはんや浄土にしてうくるところの樂は、法性に隨順せる眞実無為の樂なり。『大經』（卷上）には「但有_二自然快樂之音_一、是故其国名曰_二安樂_一」といひ、『阿弥陀經』には「但受_三諸樂_一、故名_二極樂_一」とき、『論』（浄土論）には「受_レ樂常無_レ間_一」とも判じ、「觸者生_二勝樂_一」（浄土論）とも讀ずるは、みなこの樂なり。

この問答は、「樂」とはいかなるものか詳述するものである。『俱舍論』等に説かれる天界は、そこで受ける樂によつて分類される。存覚は、その最上階である第四禪は、色界であつても苦や樂を捨て去つた境地である、にもかかわらず極樂浄土が「樂をきわむ」とはどういうことかという問いを設けている。そして、『論註』を依用し、三種の樂があることを明かにしつつ、念仏の行者に限つて言えば、法樂とは此土において凡夫の身のまま受ける樂であることを示す。さらに、浄土で受ける樂とは「眞実無為の樂」であり色界の樂とは異なることを善導『觀經疏』「定善義」などを用いて示していく。

次に『六要鈔』と『論註』には「樂」について以下のようにある。

・『六要鈔』「証文類積」⁽⁶⁷⁾

「樂有_レ」等者、問。「五識所生樂」者、欲・色界中何耶。

答。今註釈意、欲界樂也。問。樂分_二内外_一、其義如何。

・『論註』卷第五⁽⁶⁸⁾

「樂有三種」等者、欲界五識相応樂受名_二为_二外樂_一。下三

静慮意識相応樂名_二为_二内樂_一。若約_二三五受門_一、唯第三禪是

答。言「外樂」者、彼前五識相応之樂縁ニ外境ニ生。是故称云ニ外門転也。言「内樂」者、此是意識所生樂。故不從ニ外生。是故号曰ニ内門転也。

問。於ニ欲界中、又有ニ意識相応之樂、即是喜受。何不レ挙レ之。答。以ニ外門転ニ為ニ外樂、故、彼内門転不レ加レ之也。

問。如ニ此義ノ者、下「内樂」中何不レ撰レ之。答。内樂約レ定。此以ニ散、故非ニ内撰也。

問。是猶難レ思。有ニ三樂中不レ尽レ樂過、須ク言ニ四樂ニ別立レ之歟。答。欲界意識相応樂者、約ニ五受辺ニ是喜受也。既是云レ喜、不レ撰ニ樂中、是有ニ何過。

問。如ニ今所立、約ニ五受ニ者只第三定心悅名レ樂、余処皆喜。此義「唯識」・「俱舍」等意、共以不レ違。今依ニ何義、初・二・三禪総称レ樂耶。答。依ニ五受辺ニ誠如ニ所難。若依ニ三受ニ不レ分ニ身心、総云ニ苦樂。今之註釈依ニ三受ニ故、総言ニ之樂。敢無レ違耳。

問。於ニ此三樂、云何分ニ別定散、世間及出世間、并漏与ニ無漏等之義上耶。答。約ニ定散ニ者、初ニ唯散、次ニ是

樂受定。初二靜慮即喜受定。今約ニ三受。故下三禪総名為レ樂。

問。此中何無ニ欲界喜受。答。内樂是定、外樂是散。所レ言外者、是五妙境、故此不レ撰ニ欲意地喜。所レ言内者、即定樂、故不レ撰ニ散喜。

問。若爾別ニ立ニ欲意地喜、応レ為ニ四樂。若不レ爾者、有ニ樂不レ尽。答。恐積不レ曲。「法樂樂」者、法謂佛法樂、謂移レ風易俗之義、移ニ生死回曲ニ易ニ無漏徑路ニ。樂謂智慧愛仏樂也。

問。約ニ此三樂ニ云何分ニ別定散世出世。答。初ニ是散、後ニ是定。初ニ唯有漏。次ニ一通ニ二種。後ニ唯出世也。

定、但第三樂又有レ通_{ズルコト}。散_ニ。聞_テ法_ヲ歡喜_{スル}愛_ニ仏_ノ功德_一之
 分別等、是散。故也。世出世者、初一世間、次一_ハ是通_ニ
 世間・出世_ニ。外道所得_ハ是世間禪、聖者所得_ハ出世間也。
 後一出世_{ナリ}。漏・無漏者、初一有漏、彼前五識_ハ因位一向
 有漏_{ナルガ}。故也。次一_ハ是通_ニ漏_ト与_ニ無漏_ト。所謂外道及凡夫等_ハ是
 有漏也、聖者所得_ハ是無漏也。後一樂者、約_{スレバ}所緣法_一一
 向無漏、約_{スレバ}能緣機_一又通_ニ有漏_ト、地前機等有漏_{ナルガ}。故也。

『六要鈔』では、『論註』所説の樂について『顕名鈔』に比べ詳しく註釈しているが、形式や問答の課題などは『論註記』と同様であり、『論註記』に沿って註釈を進めていると思われる。また、『論註』に説かれる三樂（外樂、内樂、法樂樂）について、存覚『顕名鈔』『六要鈔』、並に良忠『論註記』の説示を表にまとめると以下のようになる。

『論註』三樂	外樂（欲界五識所生の樂）	内樂（初禪・二禪・三禪意識所生の樂）	法樂樂（智恵所生の樂）
存覚『顕名鈔』	欲界の樂	色界三禪の樂	念仏者にしていえば、浄土穢土に通じる

存覚『六要鈔』	散、世間・有漏	定、世間・出世間に通じる、有漏無漏に通じる（凡夫外道は世間・有漏、聖者は出世間・無漏）	定散に通じる、出世間、有漏無漏に通じる（所縁の法に約すれば無漏、能縁の機に約すれば有漏）
良忠『論註記』	散、有漏	定、有漏無漏に通じる	出世間

まず『顕名鈔』と『六要鈔』を比較すると、後者がより詳細に註釈しているが、前者の枠を出るものではなく違いは見られない。存覚の『論註』理解について、先に示した撰述期を跨いで比較できる箇所は非常に少ないが、存覚の『論註』理解に変化は認められない。また、存覚が、『六要鈔』において樂を定・散や世間・出世間、有漏・無漏に配当するのは『論註記』の影響によると思われるが、法樂樂についての理解を見ても内容への影響はない。また、『六要鈔』の『論註』註釈箇所を対応する『論註記』の文と比較すると、多くの箇所ですべて『論註記』の分量が非常に多く詳細である。一方で、右のように『六要鈔』の分量が多くなっているのは、存覚がこの「樂」についての概念を重要視しているということでもあろう。

おわりに

以上本稿では、存覚『六要鈔』における『教行信証』内の『論』・『論註』引用文註釈箇所について、良忠『論

註記』との関連性を中心に、註釈方法について検討した。存覚は『六要鈔』において『教行信証』を註釈する際、多種多様な經典を縦横無尽に用いながら宗祖義の顕揚を行っている。その引用態度について従来より通仏教的であるとの批判がなされてきた。しかし、『論』『論註』の註釈態度をみたとき、存覚は自在に諸宗の典籍を用いつつ、それらを宗祖義に抵触させない、巧妙な註釈を展開するのである。

『浄土論』引用文の註釈については、文の上からは『論註記』との関連は見られず、引用文を示しても『論註』の関連箇所を引用して註釈しているのみである。

次に、『論註』引用文の註釈については、先行研究で指摘されているように『論註記』との関連が見られる。存覚は、他宗他派の書物であっても、先人の説を一指針として確認し引用を行っている。

本稿では、引用文以外にもさらに細かく確認を行った。存覚は、『論』と同様に基本的に自身の言葉で註釈を加えるか、『論註』の関係箇所を引用することにより解釈を行う。そのような中で、『論註記』との関連が見いだせる箇所は、全体の『論註』引用文に対して半数以下である。さらに、全面的にその解釈を採用している箇所は証①②の二箇所にとどまっている。その他、一部『論註記』を用いつつ解釈を行っている箇所も、単純な経文の語句説明など、汎用性のあるものについては、『論註記』をそのまま援用することもあるが、基本的には宗祖義を基軸に註釈を行っており、受け容れがたい思想については『論註記』の説は採用しない。中には、『論註記』の名を挙げないが、その説を明確に否定する箇所も確認できた。

また、存覚教学研究では、撰述時期の異なる著作間の思想の展開が課題であるが、『六要鈔』と撰述期が異なる『顕名鈔』などの著作に目を向けてみても、『論註』の註釈については変化は見られない。

存覚が、なぜ『論註記』に依ったのかは、当時の『論註』註釈書の流布状況や、存覚の東国での活動についても

検討を要すると考えるが今後の課題としたい。

(註)

- (1) 『浄土真宗聖典全書』五一六一五(以下、『聖典全書』とする。また、単に頁数を示す場合は『聖典全書』に限り書名を略して「巻数―頁数」と表記する)。
- (2) 五一六三六。
- (3) 藤田真証「西吟教学の研究―近世初期教学の課題―」(龍谷大学大学院博士論文、二〇一一年)
- (4) 信楽峻麿、真宗学シリーズ④『真宗教学史』(二〇一一年、法藏館、四〇頁)など。
- (5) 長谷法薫『教行信証』と存覚上人『無尽灯』一九一三、一九一四年。
- (6) 岩田光「存覚教学の研究 ―『六要鈔』を中心に―」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三八、二〇一六年。
- (7) 漢籍における訓詁の形式については、古勝隆一『中国註疏講義―経書の巻―』(法藏館、二〇二二年)に詳しい。
- (8) たとえば『教行信証』「総序」の冒頭「竊以…」(二一六)に対し、『六要鈔』では「言…」(竊以)「者、發端之言…」(四一〇〇〇)とその一言一句について細かな註釈を加え、本文を解説していく。
- (9) 四一九九七。
- (10) 二一九。
- (11) 四一〇〇九。
- (12) 存覚は、浄土教の祖師として『浄典目録』では、曇鸞・道綽・善導・懷感・少康を挙げて「浄土宗五祖」(六一―二六三―二六四)とし、続けて「唐土」として法照・道鏡・迦才・浄影寺慧遠・吉藏・憬興・義寂・法位・法聰・智顛・法常・元

存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について

照・戒度・智円・基・王日休・宗暁、「和朝」として源信・永観・源空・親鸞・覚如の名前を挙げている。少なくとも上記の諸師について存覚は浄土教先師と認識していたと考えられる。

(13) 二二二五。『論』は一四四三三。『論註』は一四四五五。『六要鈔』は四一〇四六。なお、以下同様に『論』『論註』『六要鈔』の当該箇所も併せて記載する。

(14) 二二二五。『論』：一四四三三。『論註』：一五二六。『六要鈔』：四一〇四七。

(15) 二一八九。『論』：一四四三三。『論註』：一五二六。『六要鈔』：四一一一九。なお、この引用文を『聖典全書』二では、

『論註』としているが、本稿では『六要鈔』に従い『論』に分類した。

(16) 二一三七。『論』：一四四三三。『論註』：一五二六。『六要鈔』：四一一七七。

(17) 二一七〇。『論』：一四四三三。『論註』：一四五二。『六要鈔』：四一二二二。

(18) 二二二五。『論註』は一四四九。『六要鈔』は四一〇四七。『論註記』は『浄土宗全書』一一二六〇（以下、「『浄全』巻数―頁数」とする）。なお、以下同様に『論註』『六要鈔』『論註記』の当該箇所も併せて記載する。

(19) 二二二六。『論註』：一四五二。『六要鈔』：四一〇四九。『論註記』：『浄全』一一二七一。

(20) 二二二八。『論註』：一四九二。『六要鈔』：四一〇五一。『論註記』：『浄全』一一三一四。

(21) 二二四八。『論註』：一五〇二。『六要鈔』：四一〇七五。『論註記』：『浄全』一一三一九。

(22) 二二五一。『論註』：一五二六。『六要鈔』：四一〇七九。『論註記』：『浄全』一一三四〇。

(23) 二二五六。『論註』：一五〇九。『六要鈔』：四一〇八二。『論註記』：『浄全』一一三二七。

(24) 二二五六。『論註』：一四七六。『六要鈔』：四一〇八二。『論註記』：『浄全』一一二九八。

(25) 二一六〇。『論註』：一四五二。『六要鈔』：四一〇八四。『論註記』：『浄全』一一二六八。

(26) 二一六九。『論註』：一四八九。『六要鈔』：四一一〇〇。『論註記』：『浄全』一一三一。

(27) 二一八七。『論註』：一四九〇・五二九。『六要鈔』：四一一一八。『論註記』：『浄全』一一三二二・三四二。なお、この

箇所については、存覚が二文まとめて註釈しているため、それに従った。

- (28) 二一八八。『論註』…一四九二。『六要鈔』…四一一一八。『論註記』…『浄全』一—三三五。
(29) 二一八八。『論註』…一五一五。『六要鈔』…四一一一八。『論註記』…『浄全』一—三三三。
(30) 二一九一。『論註』…一五一九。『六要鈔』…四一一二六。『論註記』…『浄全』一—三三六。
(31) 二一九六。『論註』…一五一九。『六要鈔』…四一一三二。『論註記』…『浄全』一—三三五。
(32) 二一九六。『論註』…一四七四。『六要鈔』…四一一三三。『論註記』…『浄全』一—二九四。
(33) 二一二五。『論註』…一四八三。『六要鈔』…四一一六〇。『論註記』…『浄全』一—三〇四。
(34) 二一二四。『論註』…一五〇一。『六要鈔』…四一一七一。『論註記』…『浄全』一—三一九。また、以下の三文は『聖典
全書』二には一文として翻刻されているが、本稿では『六要鈔』に従い分割した。
(35) 二一二四。『論註』…一五〇一。『六要鈔』…四一一七一。『論註記』…『浄全』一—三一九。
(36) 二一二五。『論註』…一五〇二。『六要鈔』…四一一七二。『論註記』…『浄全』一—三一九。
(37) 二一二五。『論註』…一五〇三。『六要鈔』…四一一七二。『論註記』…『浄全』一—三二一。
(38) 二一二五。『論註』…一四九五。『六要鈔』…四一一七三。『論註記』…『浄全』一—三二七。
(39) 二一二七。『論註』…一四九三。『六要鈔』…四一一七七。『論註記』…『浄全』一—三二五。
(40) 二一二八。『論註』…一五一〇。『六要鈔』…四一一七七。『論註記』…『浄全』一—三二八。
(41) 二一二二。『論註』…一五一五。『六要鈔』…四一一八六。『論註記』…『浄全』一—三三三。
(42) 二一二四。『論註』…一五一八。『六要鈔』…四一一九〇。『論註記』…『浄全』一—三三五。
(43) 二一二六。『論註』…一五二〇。『六要鈔』…四一一九二。『論註記』…『浄全』一—三三六。
(44) 二一二七。『論註』…一五二一。『六要鈔』…四一一九四。『論註記』…『浄全』一—三三七。
(45) 二二一四。『論註』…一五二二。『六要鈔』…四一一九四。『論註記』…『浄全』一—三三八。

- (46) 二一四九。『論註』…一五二三。『六要鈔』…四一一九七。『論註記』…『浄全』一三三九。
- (47) 二一四九。『論註』…一五二四。『六要鈔』…四一一九八。『論註記』…『浄全』一三三九。
- (48) 二一七〇。『論註』…一四九五。『六要鈔』…四一一二三。『論註記』…『浄全』一三七六。
- (49) 二一七〇。『論註』…一四五八。『六要鈔』…四一一二三。『論註記』…『浄全』一三二七。
- (50) 二一七一。『論註』…一四七〇。『六要鈔』…四一一二五。『論註記』…『浄全』一二八九。
- (51) 二一七二。『論註』…一四九三。『六要鈔』…四一一二六。『論註記』…『浄全』一三二五。
- (52) 二一七二。『論註』…一五〇三。『六要鈔』…四一一二七。『論註記』…『浄全』一三二二。
- (53) 二一七二。『論註』…一五〇九。『六要鈔』…四一一二七。『論註記』…『浄全』一三二七。
- (54) 二一九四。『論註』…一四五五。『六要鈔』…四一二七七。『論註記』…『浄全』一三七三。
- (55) 四一一七一。
- (56) 『浄全』一三二九。
- (57) 四一一二六。
- (58) 『浄全』一三三五。
- (59) 四一〇七五。
- (60) 『浄全』一三二九。
- (61) 『安樂集私記見聞』については、良榮著と伝えられるが、内容から更に後世の著述とされている(塚本善隆「曇鸞道綽両師の著作とその末註解説」『浄土宗典籍研究』山喜房、一九七五年、二〇頁)。
- (62) 『浄全』一七八〇。
- (63) 『女人往生聞書』については、元亨四(一三二四)年と元応二(一三二〇)年の二説あり。
- (64) 『顕名鈔』については、建武四(一三三七)年と暦応元(一三三八)年の二説あり。

- (65) 外川 樊 「存覚の思想転回」 『日本思想史研究』 三〇、一九九八年。
(66) 四一―六五六。
(67) 四―一九五。
(68) 『浄全』 一―三三八。

「存覚『六要鈔』における『浄土論』・『往生論註』の註釈について